

新潮文庫

海 (うみくら) 暗

有吉佐和子著



新潮社

	うみ海 くら暗 定価はカバーに表示してあります。
--	---

新潮文庫 草 132 G

昭和四十七年十月三十日 発行
昭和四十八年六月三十日 三刷

著 者
有^{あり}吉^{よし}佐^さ和^わ子^こ

発 行 者
佐 藤 亮 一

発 行 所
株 式 会 社 新 潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)二六〇一一
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

海

暗

有 吉 佐 和 子 著



新 潮 社 版

2085

海

暗

比較的傾斜のない場所に頃合いのタミの木を見つけると、オオヨン婆は懐ろから古新聞を引張り出し、くしゃくしゃと揉んで木の根元に押えつけた。快晴が続いていた。今日は西風で海は波が高いけれども、山の落葉は乾いている。オオヨン婆は背負い籠の中から細竹を編んだ小さな熊手を出すと、タミの木のまわりの落葉を掻き集めては根元に積上げていった。古新聞がすっかり見えなくなるまで枯葉を集めると、また背負い籠の中に手を突っこんで、今度は小型のバケツを取出し、腰をのばして、ボロ沢の方へ降り始めた。岩の多い山だ。樹木もびっしり生い繁っているのだが、降りるほど疎になって、オオヨン婆の視界は次第に明るくなった。

ボロ沢は里から山道を歩いて一時間ばかりのところにある川の名前なのだが、特にボロ沢と名差されているのは丁度水が穏やかに憩う中流の辺りであった。オオヨン婆が山を登るときにはいなかったのに、子供たちが数人川べりの叢のかげに蹲っていた。彼らは、オオヨン婆の姿を認めると、飛び上って口々に云った。

「やっぱりそうだ、オオヨン婆だんきや。草祀り神さまの前の草は、オオヨン婆のあげたものだったんだ」

「何してるだ、オオヨン婆」

「お前らこそ何してる」

「ヨモギ摘みだぞ」

「なして」

「餅搗くンだんきや」

「なして。恵比寿講か」

小学校初等科に通う子供たちには、恵比寿講という古い言葉は耳なれなかった。だが彼らはそれを問い返すよりもヨモギ摘みの理由の方を云いたかった。

「カツオドリの日は手が足りねエだから餅喰わせるってよオ」

「菜を煮る手間がねエだから、草餅にするだぞ」

「ヨモギはビタミンがあるだからな」

「ボロ沢のヨモギは一番柔らかで味がいいと母ちゃんが云ったぞ」

この島の緑は年中絶えるということがない。秋はヨモギが腰のあたりまで丈高く繁る。子供たちの説明で納得したのかどうか、オオヨシ婆は黙って川べりに近づくと、手に提げていたバケツで水を汲みあげた。

「オオヨシ婆は何しに来た」

子供たちの中にいた梅子が訊いた。オタネン婆の長男の末子だ。オタネン婆はオオヨシ婆の娘だから、梅子はオオヨシ婆の九人いるヒマゴの一人である。

「木を焼ぎに来ただんきや」

オオヨン婆は答えると、踵くびすを返していま来た道を歩き出した。山の中だから道らしい道があるわけではない。しかしオオヨン婆にとって一世紀の四分の三も駆け歩いている土地の中で、どの木も顔かお馴染なじみなら木の方でもオオヨン婆には愛想がよく、オオヨン婆が足を踏み入れると森も林も道を開いてみせるようだった。

「どの木を焼くだ、オオヨン婆」

子供たちはヨモギ摘みを中断して、皆で婆の後について登って来ていた。オオヨン婆は話好きだが無駄なことは喋しゃべらない。この質問に答える必要はないのだった。幼い子たちは訊いたことも忘れて、銘々に焼くに相応ふさわしい木を物色して歩いているのだったし、それこそ教育というものだった。若木は焼くに忍びない。木の種類によって焼いても役に立たない樹木がある。子供たちは山道をすばしこく駆け上りながら、自分だったらどの木を焼くかという考えに熱中して、山の木を一本一本注意深く吟味していた。

「あつたぞ」

「これだ」

オオヨン婆を追い越した子供たちが、根に枯葉を集めたタミの木を見付けけるまでに長い時間はかからなかった。

「オオヨン婆、なしてこの木にきめた」

梅子が訊いた。彼女には納得しかねるものがあつたのだろう。タミの木は育てば一抱かかえできかないほどの大木になる木だった。それがまだ直径十五センチほどの若いうちに婆は焼こうとして

いる。

「枝の先を見ろ」

オオヨン婆は言葉少なく答え、背負い籠の中からマッチを取出すと、根元に蹲って古新聞の端に火をつけた。それから小さな熊手を持って、辺りの落葉を火より遠く掻き散らした。子供たちは、梅子と同じように婆に云われた通りしばらくの間じっとタミの木の枝先を振仰いで眺めていた。婆が焼く木に選んだ理由が、そうしていれば自然に解けるように思われたからだ。

「葉の色が違うぞ」

男の子が一人、ようやく発見をした。

「オオヨン婆、なして葉の色が違う」

「あの葉の色ならばな、椎茸しいたけがうんとこさ付くだんきや」

「なして」

「なしても、そうだんきや」

木の葉の色が違うのはおそらくタミの木の生命力が若くても萎なえた証拠であるのだろう。大木になる見通しを失った木を選んで、オオヨン婆は早目に根を焼いて枯らすことにしたのかもしれない。しかし、そういう理屈はオオヨン婆にはなかったし、子供たちも昔々オオヨン婆が婆の婆や婆のお父とうに聞いた通り、この葉の色は忘れまいと思うだけであった。なしても、そうだんきや、というのが、オオヨン婆の哲学だということを、島の子供たちは、よく知っている。

火が根元の落葉全体にまわって白い煙が立上るころ、云いあわしたように子供たちの姿が見え

なくなり、オオヨン婆が遠くへ掻いた枯葉を両手で集めては火の上にかぶせて、灰と火と枯葉が堆く積った頃、ぞろぞろと戻ってきた。みんなイガの中で肩を寄せあっている栗の実を、短いスカートや、シャツの裾などにからめて持っている。

「オオヨン婆、入れているか」

「おお。一所に入れるな。弾ぜるだから、伏せて埋めろ。下の灰に埋めろ」

「おお」

云われた通りにしたあと、子供たちはオオヨン婆の周りに集まって腰をおろした。

「オオヨン婆、あのボロ沢は白子屋お常が何かしたって、知ってるか」

「おお、知らないでか」

「白子屋お常って、なんだ」

「そうめん流し、しただなあ」

「そうめん流しというのは、なんだ」

ボロ沢というところは、白子屋お常がそうめん流しをしたところだという知識は、この島の者なら誰でも持っているのだが、さて白子屋お常というのは何者か、そうめん流しとはどういうことなのかという具体的なことになる、大人たちでもなかなか詳しい話のできる者は少ない。だから、子供たちはこの機会にオオヨン婆から聞いておこうと思いついたのであろう。

「白子屋お常というのはお前、婿殺しの罪でよ、大岡さまが裁きなすって、この島の流人になった女だぞ」

「悪い女か」

「にゃあ、悪いのは娘の白子屋お熊だ。これが自分の亭主をよ、邪魔に思つて殺しただ」

「なして邪魔にした」

「白子屋というのはよ、伊勢いせの材木屋でな、お常もお熊も大そうに贅沢ぜいたくしたもんだ。金を湯水のように使うで、大きな身代も潰れつぶかけたで、持参金持ちの婿をとつただ。五百両の持参金だぞ」

「とんでもねえ大金のことだ」

オオヨン婆は、それから事細かく白子屋母子おやこの悪事を説明してきかせた。もともと金が目当ての縁組だから、五百両以外は邪魔物で、それで婿を殺そうとしたのだという、子供たちは憤慨のしして、ひどい女だ、悪い奴だと罵り始めた。

「大岡さまもよ、おっそろしい女だといわれたぞ。それで娘の白子屋お熊は日本橋の袂たもとで晒さらしものになつて鋸挽のこぎりひきにされた」

「鋸挽きつて、なんだ」

「鋸を肩の上に当てがつて、ぎいこぎいこと挽いて殺すだ」

「おっかねえ」

「なに、おっかねえことがあるものか。悪いことしただから当り前だ。江戸中の人が見物に来てよ、誰も可哀かわいそうとは云わなかったぞ。そのとき、お熊の着てたのが黄八丈きはちじょうだぞ」

「八丈島のか」

「そうだぞ。おかげでそのあとしばらくは黄八丈の値が下って、八丈島の人らは買い叩かれて往生したというぞ」

音をたてて栗がはぜ始めたので、子供たちはわっと立上り、しばらく火の中から栗を掻き出すのに夢中になった。

「火を散らすな。そっと出せ。栗だけ出すだ。馬鹿、火を散らすなと云うのが分らねえだか」
オオヨン婆は、子供たちが栗を掻き出してしまふまで喚き続けた。

焼栗を、ふうふう吹きながら、子供たちはまたオオヨン婆の周りに集まって来た。オオヨン婆も、いつの間にか栗を掴んでいて、皮を剥きながら話を続ける。

「お熊は死罪だったが、親のお常の方は遠島で、この島へ来ただが、白子屋の商売もお常が亭主を押えて切り盛りしていたという腕ききだだよ、どう取入ったか知らねえが、島へ来てからもよ、食いもの着るもの本土から取寄せて何不自由なく贅沢していただ。藤の花見て歌の会したり、ボロ沢ではそうめん流しして島役人を接待した」

「そうめん流してどうするだ」

「そうめんを川上から少しずつ流して、川下で箸ですくって喰うだぞ。夏のボロ沢の水はお前、冷たくて、水は清水だ。何より贅沢な食いもんだぞ」

「うめえか」

「うめえにきまつてるでねえか。御蔵島は水がええだ。伊豆七島で清水の湧くのは、この島だけだぞ。島役人は喜んでよ、お常が本土へ帰れるようにはからっただ。お常という女は、才覚上手

だったんだな」

「そうめん流しが、なして贅沢だ」

「なしても贅沢でねえか。その頃の島は今よりもっと食いものがなくてよ、今よりもっと貧しかったんだぞ。流人の大方は飢えて死んだものだ」

「なして、島の者が助けなかっただ」

「島の者もおめえ、腹一杯喰えるか喰えねえかというときだ、送りこまれる流人にゃあ迷惑したぞ」

「ふうん」

男の子が一人、考えこんでしまった。だが、オオヨン婆は白子屋お常の話を続ける。

「お常は本土へ帰ってから島の人に空豆そらまめを礼に送ってよこしただ。空を見て思い出してる、豆に暮せという意味だぞ。帰った流人で島へ礼を寄越したのはお常さんだけだぞ」

「オオヨン婆は、お常に会ったか」

梅子が訊いた。もしそうだったら、ヒマゴの梅子も少し自慢ができるような気がする。昔は食物が少なくて苦しい生活を送っていたという話は、島の子供たちは物心つくとすぐから聞かされている。そこへ豆でも送って来たとなれば、お常は島の恩人ではないか。

「馬鹿こくな。お常の話は江戸時代だぞ。婆は明治十七年生れた。間違うでねえ」

「そんならオオヨン婆は学校へ行ったのか」

「おお。当り前だ」

「オオヨン婆は、勉強ができて、二回も飛び越しただぞ。一年生から、すぐ三年生に飛んだだ。そうだなあ、オオヨン婆」

梅子が友だちに自慢して吹聴した。

「本当か」

「本当だども、十歳で一年に上ったただからよ、勉強ができてても自慢にならねえ」

「なして十歳まで学校に行かなかったか」

「わしらの頃は、幾つで上るか、あまりはつきりしてなかっただ」

「なして」

「なしても、そうだんきや」

さっきから黙りこくっていた男の子が、このときようやく口の中から栗の甘皮を吐き出して、長い間の疑問をオオヨン婆に投げかけた。

「島が今より貧乏だったなんて、俺には分らねえな。こんなに不便でよ、何もねえところはないと云うぞ。父ちゃんも、兄ちゃんも云うだぞ。オオヨン婆、本当に昔は今よりもっと何もなかったか」

「なかったとも。俺が、お前たちのように小こい頃でも、島は今より貧しかっただ。船は今より小さい船でよ、減多にやあ来なかったぞ。今はお前、昔とは較べものにならねえほど便利になつてゐるだぞ」

「なして」

「水道も電気も、七年前から出来たでねえか。俺たちは山の水を汲んで、桶おけを頭にのせて、日に何十遍て運んだものだ。しまいにゃあ首が肩かた中ちゅうにめりこむかと思つたぞ。機織はたおりしても日暮れにゃあ止めねばなんねえ。夜はカツオドリの脂あぶらをとぼして夜業よなべしたが、あれは暗いものだぞ。今はお前、どんなときでも捻ひねればぽつと明りがついて、文化だんきや。東京と同じだぞ」

子供たちが噴ふき出した。そして俄にわかに反論してきた。

「なにが東京と同じだ。オオヨン婆は東京を見たことがねえからそんなこと云うだぞ。東京にゃあ自動車があるだぞ。ビルがあるだぞ。ハイヒールで歩けるだぞ。島にはねえものばかりだんきや」

「ビルて、なんだ」

「でけえアメリカ式の建物だ。十階まであるだぞ。エレベーターが動くだ。うちの兄ちゃんが修学旅行で乗ったと云ったぞ。東京にはデパートもあるだぞ」

「それでもお前、島の家はどこでもテレビがあるでねえか。それで東京でも、アメリカでも、坐まつていて見える。文化でねえだか」

「それならオオヨン婆、なして兄ちゃんも姉ちゃんも中学卒業すると東京へ出てしまうだ。俺たちも学校にいる間だけだぞ、島にいるのは」

「出るでねえ。出ることはねえだ」

「笑われるぞ、オオヨン婆。卒業して、島で何するだ。仕事が何もねえだぞ。なして米買うだ」
「ツゲを育てて売ればいいだ。御蔵島は昔むかしからそうして来ただ」

「そうして貧乏して来ただ」

子供がまぜっ返して、わっと笑い出した。しかしオオヨン婆は、むきにもならず、栗の皮の焼け焦げでまっ黒になった掌を、はたきながら立上り、枯枝を拾い上げるとタミの木の根元の残り火を叩いて消し始めた。子供たちは栗の実を口に押しこんで、もぐもぐやりながら見物している。火が消えたかどうか、オオヨン婆は掌を灰の上にかざして念入りに熱の具合を見ていたが、やがてバケツを持上げると注意深く根元に水をかけた。ときどきジュッと音がするのは、小さな残り火がある証拠だ。根元に蒸気の白い煙が湧いた。

オオヨン婆が、またバケツを下げてボロ沢の方に水を汲みに行くらしいのを見てとった子供たちは、もう火は消えているのに、まだ水がいるのかと驚いて訊いた。

「消えていても、よく消さねばなんねえ」

オオヨン婆は、重々しく答えた。

「消えてても、消すだか」

子供の一人が婆の説明を面白がって繰返した。すると子供たちは、またわっと笑った。

「何を笑うことがあるものか。米粒一つの火でも残しては山火事のもとになるぞ。山が燃えているものか。御蔵の御山は宝の山だ」

「ツゲとクワがあるからか」

「そうだんきや。ツゲはお前、金と同じ値打のある木だぞ。それが御蔵の山には、びっしりと植わっているだぞ。クワはお前、大正天皇の御大典にも、今の天皇陛下の御大典にも、東京から献